

野外教育活動における学生の態度変容の様態

田中 浩之、佐島 群巳、原田 涼子、溝口 綾子、本多 泰洋、伊藤 能之

Aspect of the student's attitude change in a field educational activity
Department of child pedagogy

Hiroyuki Tanaka, Tomomi Sajima, Ryoko Harada, Ayako Mizoguchi, Yasuhiro Honda, Yoshiyuki Ito

要約

教師・保育士は、幼児教育の重要な活動として「園外保育」という“野外教育活動”の計画、実践指導、評価等の教育実践をしていかなければならない。野外教育活動は、総合的な学習材として、学習の仕方や基本的な生活習慣、感性等実体験を通して学ぶことができる。計画の立案に始まり、仲間意識、自然に関する知識の習得、危険予知等保育者として考えられるあらゆることを想定した学習である。

このような社会的要請から本学の学生は、「野外教育活動」を通して、どのような意識・認識・行動等の様態が見られるか、実践過程に即して、その意識・認識・行動の様態の変容（態度変容）がどのように表出するか、を明らかにする意図から研究を展開したものである。

キーワード：野外教育活動・態度変容・グループワーク・社会的行動

Summary

A teacher and the childcare worker have to do educational practice of the plan of the "field educational activity" "outside childcare", practice instruction, evaluation, etc., as important activity of early childhood education. Then, the field educational activity observed.

I thought that a field educational activity could be studied through real experiences, such as the method of study, a fundamental lifestyle, sensitivity, as synthetic study material.

It is study supposing all the things it starts in planning of a plan and are considered as child-care workers, such as acquisition of the knowledge about group consciousness and nature, and a dangerous forecast.

The student of this study let the "field educational activity" pass from such social needs, and it was based on aspects, such as what kind of consciousness, recognition, action, etc., are seen and a practice process, meant how the change (attitude change) of the aspect of its consciousness, recognition, and action would express, and set up this theme.

This research has already carried out a report and of the result of practical research of a field educational activity by writers, and develops the research expansively and continuously.

Keyword : A field educational activity, an attitude change, group work, and social action

1 研究の所在

大学改革は、社会環境の変化にともなって必然的帰結として行われている。その主なものは、少子高齢化にともなう学生数の減少、経済的理由から、中途退学者が増加する傾向にある。それらの問題状況に加えて、大学のカリキュラム、授業実践力の質的転換を図ることが求められているのは、すなわち、学生の中に学習意欲喪失、学習目標の不確実性などによる「学習遅滞性」「学業不振性」が極端に多くなってきたから

である。このように学習の意欲、目的を失っている「学業不振の学生」に我々教師は、どのように対応していったらよいのだろうか。我々は、この問題に真剣に取り組んでいく必要がある。

このような学生の学業不振は、心理的、社会的な「つまずき」、「社会的不適応」などの要因によるものであることが予想される。それらの本学学生は、やがて卒業とともに幼稚園教諭（以下「教師という」）として、こども教育学科専攻科を修了すれば、保育士として勤務することになるわけである。

そして、彼らは、子どもたちの前で、教育者として、子ども一人ひとりを見守り、適切に「実践的指導力・援助力」を発揮されなければならない。

ましてや、教師・保育士は、幼児教育の重要な活動として「園外保育」という“野外教育活動”の計画、実践指導、評価等の教育実践をしていかなければならない。そこで、注目したのが、野外教育活動である。野外教育活動は、総合的な学習材として、学習の仕方や基本的な生活習慣、感性等実体験を通して学ぶことができる考えたのである。計画の立案に始まり、仲間意識、自然に関する知識の習得、危険予知等保育者として考えられるあらゆることを想定した学習である。

このような社会的要請から本学の学生は、「野外教育活動」を通して、どのような意識・認識・行動等の様態が見られるか、実践過程に即して、その意識・認識・行動の様態の変容（態度変容）がどのように表出するか、を意図して本テーマを設定したわけである。

本研究は、既に筆者らによって野外教育活動の実践的研究の成果を報告⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾してあり、その研究を発展的・継続的に展開するものである。

2 研究の目的

- (1) 野外教育活動に参加する学生は、野外教育活動にどのような期待をもっているか、その達成の様態を明らかにする。
- (2) 野外教育活動の実践過程において学生は、どのような実践行動をしているか、その行為の背景・要因を分析的に明らかにするとともに、野外の実践活動を通して、学生の学習態度、社会的行動（生活態度）の変容の様態を明らかにする。

3 研究の方法

- (1) 野外教育活動の事前・事後の研究活動、GW（グループワーク）を中心に実践活動をする。
- (2) 野外教育活動に対する意識行動の様態をアンケート、レポートから分析・考察する。

4 結果の考察

(1) 野外教育活動の実践過程

表1は、大房岬少年自然の家における野外教育活動

表1 野外教育活動の実践プログラム

月	主な活動		備考
	授業過程	学生の活動	
①8/17 ②12/16 ③1/16	1. 実地踏査	1. 野外教育活動の目的	12/16 学生代表による実地踏査
①11/5 ②11/13 ③11/20 ④12/4 ⑤12/25 ⑥1/16 ⑦1/22 ⑧1/29	2. 事前指導	2. GW テーマ・個人テーマの設定	
2/16	3. 直前指導	3. 社会的行動目標選定、社会的参加、役割の確認	GW テーマ研究発表会
2/17～2/19	4. 現地指導	4. 地域観察・GW テーマ研究の中間発表	
2/26	5. 事後指導	5. 野外活動の振り返り・GW テーマ研究のまとめ	
3/5	6. レポート提出	6. 各班担当教員へ提出	全教員参加による評価
3/10	7. レポート評価	7. 個人レポート評価	

の実践的活動を時系列的にまとめたものである。この中で、教師の重視したことは、学生自ら「課題」を持って、「なんでも見てやろう」という目標と意欲を持つよう動機づけたことである。また、グループ活動を取り入れ、学生の自己課題の深化、話し合い・分かち合いの困難さを学生に実感させたことである。

(2) 野外教育活動の目的

こども教育学科の学生は、幼・保教育実践において、幼児一人ひとりにどのように向き合い、かかわり合い、どのように対応した指導・援助が必要であるかを学習する。

それぞれの幼・保の保育機関では、子どもの発達の特徴を踏まえて、「散歩」「遠足」「お泊り保育」など

の野外教育活動を実施している。その野外学習の実施に際して、教師（保育士）は、実施の場の設定から、実施方法（活動のさせ方、安全の配慮の仕方）等について緻密な計画（plan）－実践（do）－反省・評価（see）の全実践過程を見通した実施案を作成しなければならない。

こども教育学科の野外学習は、幼保教育機関における野外での豊かで安全・安心な活動を可能にする「野外学習実践プログラム」を自から作成し、実体験を通して学ぶことを目的とする。

学生は、学生生活にも慣れ、自らの専門性を高めるために、目的を持って、しかも、意欲的に野外学習の準備と研究に取り組む。

野外学習は、学生同士の共通の目的意識を持って、課題解決のために相互に学び合い、関わり合い、課題解決の方法を身につけるとともに、宿泊活動という限られた場において「人間関係を深める」ことを目的として実施する。

（3）大房岬での野外教育活動

①現地の人々との出会い

教師や保育士は、一般的教養として、「現実社会」や「職業」「生産関係」「地域間相互関係の理解」などに関心と認識を深めることが求められている。このことは、教育職員養成審議会答申（平成9年）に現在の教師に求められる次のような三つの資質能力^(註1)として明示された。要約すると次のとおりである。

- ①地球的視野から人類的、地球的課題に関心と認識をもつこと
- ②社会の変化への対応する資質としての関心と認識をもつこと
- ③普遍的に変わらない教師に求められる「実践的指導力」「教育力」「人間力」をもつこと

そこで、平成22年度の野外教育活動は、新たに三つの地域の観察の場を設定した。その理由は次の通りである。

ア 半農半漁の「坂本さん」

「坂本さん」は、半農半漁である。これは、日本の一次産業の典型的なもので、稲作と家畜、野菜と稲作のように複合経営が主である。専業農家で成立の第一次産業は、大規模的稲作か酪農である。自分たちの食生活との関連性を認識させることが目的で取り上げてみた。

イ 富浦漁港協同組合「村井さん」

「村井さん」は、富浦漁協に務めている。400人の組合員の漁業活動を支援し、組合員家族の厚生活

動の支援をしている。

ウ 房洲うちわの伝統工芸士「太田美津江さん」

「太田美津江さん」は、千葉県にいる「うちわの伝統工芸士二人の中の一人」として、太田屋の四代目を受け継いでいる方である。

野外教育活動は、これまで野外の自然観察を中心として生物多様性の観察と野外体験における「予測できる危険予知、予測できない危険予防」について確かめることが極めて重要なものとなっている。

②GW テーマ研究に向けての活動

GWのテーマ研究の報告に向けて、各グループは、野外で観察・調査して得られた資料・情報をもとに、「見て、わかる」ように発表提示資料を加工表現するわけである。

殆ど、模造紙を用いて、図で表記したり、絵図に表現したり、実物（拾ってきたもの）を貼り付けたり、遊び道具を作ったりなどして、グループ全体が一体となって製作活動する。

模造紙という一頁（788×1091mm）のスペースに「何を選んで」、選んだ資料・情報・具体物を「どのように構成するか」、構成した作品を一つの教材として「どのように価値づけるか」、それを用いて学生に「どのように伝達するか」という一連の活動過程から生み出された「価値ある情報」を報告することになるわけである。報告する場合は、テーマ研究を分担したことを中心に聞いているものに「分かる」ように「発表原稿」を作成する。

各自作成した発表原稿を班長を中心にしてテーマ研究を、全体の中にどのように関連付けるか話し合い、「修正付加」「加除訂正」などを何度も繰り返して、報告に入るわけである。

大房岬では、観察・調査がイメージできるように作成した作品を手掛かりにそれを提示したり、指示したりしてグループテーマについて発表をするのである。

中間発表では、各自次の三つの評価観点に即して発表を評価する。（評価記述時間3分間）

- ①研究テーマに相応しい観察・調査がなされていたか（資料・情報を収集）
- ②研究の目的に合ったまとめ方をしているか（目的的表现）
- ③グループワークがうまくいっているか（協働の様子）

評価表例

学籍番号（ ） 氏名（ ）

発表順	グループ「研究テーマ」	評価の観点 (①発表内容の取り上げ・深まり ②発表の仕方)
4班	自然を使った遊び	<u>予想されることを事前に調べたことと実際にできた遊びを比較して</u> いてよかった。実際に使っていたのもよかった。遊びの内容を <u>しっかり説明していたので</u> よかった。
5班	落ち葉やドングリで幼稚園に飾ることが できる壁面を作る	<u>壁面の完成度が高いので</u> 驚いた。工夫されている。 <u>葉っぱに絵の具を塗って模様をつけていたのが</u> よいアイデアだと思った。
6班	季節の自然と触れ合う	<u>いろいろな雑学・雑談を交えて話していたので、楽しく聞くことが</u> できた。このグループは、この活動で知識が多くなっただろうなど思った。 <u>素晴らしい発表</u> だった。
1班	様々な自然とのかかわり方	<u>植物編と動物編に模造紙を分けて説明していたので</u> 見やすかった。 <u>事前に調べたことも説明して</u> わかりやすかった。 <u>ドングリを食べることに挑戦して</u> 驚かされた。

(Mの評価例 (筆者傍線))

③GWテーマ研究成果発表と評価

GWテーマ研究成果中間報告会は、大房岬少年自然学校で「中間発表(2月19日)」を行う。

最終報告会は、大学において、中間発表の5日後(2月24日)に行った。最終報告までの5日間は、各テーマ研究をさらに深化して、充実した成果を得られるように各GWの計画的研究がなされる。しかし、現実には、5日間のGW研究は、実施されたところとそうでないところがあった。学生の問題意識は、継続的発表のできなかったいくつかの理由があったことがうかがえる。

GWテーマ研究の最終報告会には、発表の長短の評価を行うために、一人ひとり上記のような評価表を記録して提出させた。(評価表参照)

評価表に記載する場合、次の評価観点を明示しておいた。

- ①発表内容の取り上げ・深まり
 - ②発表の仕方

発表時間は、10分間とし、評価表に記載する時間は「3分間」設ける。殆どの学生は、3分間に現地での中間報告会と最終報告会の発表内容を比較しながら、「研究内容の深化・変容」していること、「発表の仕方」などについて評価しているのである。

④集団生活における社会的行動

野外体験活動においては、特に集団的、協力的活動が重視される。野外におけるGWにおいては、「社会

的行動規範」という一定の社会的行為が要求される。今日、野外教育活動を実践する学生は、当然、学生としての自覚を持つとともに一人の社会人として、社会的行動によって、学生同士の融和関係、人間尊重という規範をもって、対応していることが望まれる。

今日の学生の人間関係は、河合隼雄が「関係喪失」⁽⁴⁾時代といわれるように社会性、人間関係が衰退していると言える。現代社会は、価値多様化社会といって、自己の生き方・あり方が自己によって決定し、他人に言葉や指示をさしはさむことができないというような錯覚に陥っている。

イギリスの教育学者ホワイトヘッドは「多くを教えることなかれ。教えるときは、徹底して教えよ」という。つまり、教育は、教える基礎・基本を明確にして教えることだ、ということである。と同時に学生自らは、「目的もなく、あれも、これも学ぶことなく、学ぶ時は、目的を持って徹底して学ぶべし」といいかえることもできよう。

このことは、野外に出たなら、目的を持って野外の自然と社会、人間との出会いを徹底することである。その自然、社会の中で自分らしい個性を大切にすることは、社会性を育むことに通じるからである。すなわち、個人個人は、社会化され、社会人としての個性が生かされる必要があると、考える。これを筆者は、個性、そのよさが社会の中で認められることで「社会化された個性」⁽⁵⁾と述べている。このことを河合隼雄は、個性と社会性との矛盾性の中で、「人間はどう生きたらよいか」「教育は、どのような在り方を目指し

ていったらよいか」について次のように述べたい。

現代社会の一員として生きてゆくためには、人間は、実に多くのことを身につけねばならない膨大な知識として、社会人として、暮らしてゆくのに必要な規範、対人関係を維持する能力などを身につけなければならない。⁽⁶⁾

教師は、知識だけでなく、「社会的規範」を身に付ける教育力を持たなければならない。将来、幼稚園教諭として、保育士として、その職責を全うするには、集団における協働により、問題解決力を育てることが大切である。それは、人間関係の調整能力としての「社会的行動力」育成が求められているからである。

⑤グループワーク (GW)

班別課題研究テーマを設定し、設定理由を明確にし、事前に調査・研究・情報収集を行う。現地では、研究を全て班活動・班行動が中心となる。全員が快適に過ごせるようにお互いに配慮することが求められる。GWによる集団思考は、学生同士の人間関係を調整しながら問題解決を通して、認識深化と自己変容を期待できるということが、班活動からうかがえる。GWは、個々の学生のアイデアを出し合い、優れた個性を仲間同士で認め合うということであり、このことを社会的個性化と言える。

5. 野外教育活動への参加意識、心構え

(1) 野外教育活動への願い

学生は、「野外教育活動に対してどのような期待をしているだろうか。」この設問は、野外教育活動への参加意欲と目的を把握することを意図したものである。

表2でわかるように「a 人間関係を調整して、助力、集団での助け合い、仲良くしたい (41名)」という願いをもっていることが表出している。これは、日常的に学生同士の人間関係を調整する学びの場、かかり合いの場がないための反応とも言えよう。次に注目したいことは、「c 目標達成の可能性 (20名)」「g 将来への可能性 (28名)」である。このことは、今回の野外教育活動の中心の期待と考えられる。

学生は、将来、保育士としての希望や願いをもっているだけに、この願いや期待を実現する野外教育活動として野外学習の存在意義があると考えたい。

次に問うたのは「野外教育活動へ心配することがありますか」である。これに対して、最も多い反応を示したものは、次のようなものであった。

- ①「d 健康生活管理」(93%) である。これは、日常生活習慣と24時間の規律正しい団体生活へ適応できるかどうか心配しているのである。(以下アンダーラインは、全て筆者によるものである。)
- ②「b 人間関係」(24%) である。これは、今まで交

表2 野外教育活動への期待 (41名中)

反応例	頻度数
a 人間関係の調整を図る	41
b 子どもの目線で活動できる	22
c 目標達成の可能性	20
d 健康安全	13
e 自然との触れ合い	11
f 授業の一貫―野外に行きよかつたと言え るように	4
g 将来性への可能性	28
h 自己の成長動機	4
i 無事過ごしたい	2
j なし	4

流のなかった人と一緒に活動ができるかという心理的不安があるからである。そのため、学生は「相手に不快感を与えないようにしたい」「その場の雰囲気をごわさないようにしたい」「迷惑をかけないようにしたい」という自己抑制的の反応が見られることにも注目したい。しかし、実践活動においては、この項目について実践できたか、自己評価させてみたい。

(2) 野外教育活動の体験の様態

以下に提示する表3、4、5、6、7、8は無作為抽出で上位10名を選んで分析したものである。10名を選んだ理由は、ほとんどの学生がどの設問に対しても野外教育活動についての問題意識を共有し、10名の学生と共通の捉え方をしているからである。抽出された学生は、他の学生と遜色のない認識・表現をしているのである。この10名の学生記述内容から全体を推察・考察することができる考えたからである。つまり、10名の学生を見ると全体の傾向が把握できるという理由から選んだのである。

表3は、「野外体験において『発見したこと』『身につけたこと』は、どんなことですか。」の設問に応えたものである。

発見したことの中には、「自然のものを使って遊ぶこと」「あまりなれない仲間とのGWは大変だ」「実際に歩いてみて自然の木、葉などたくさんの種類のことを発見できた」というとらえ方をしている。

野外教育活動によって学生は、身につけたこととして、次のようなことをあげている。「子どもの目線になるということは、実際の普段の目線より低くしたり、歩くスピードをゆっくりしたりすることによって、普段気づかない自然を見ることができた (S.O)」この子どもの目線とは、「教師は園児の活動様態に合

表3 野外教育活動の体験で学んだこと

(10名中)

	分析カテゴリー	具体的事例	頻度数
発見した こと 感動した こと	都内と比較して	<ul style="list-style-type: none"> 事前調べで見られなかったものを今回見つけて、それを使っているいろいろな作品や遊びをみんなで考えることができた。(Y) 普段過ごしている生活の中に、意外にもたくさんの危険を見つけることができた。(N) ・子どもの目線で見るということは、なかなか理解できなかったが、グループのみんなで一緒に考えることができた。(S,I) 集団で歩いてみて自然の木や葉などたくさんの自然を発見できた。 自然を使ってどんな遊びができるかを発見できてよかった。(O) 集団生活の大変さ—あまりかかわらない子たちの集まりのグループだから大変。(K) 	7
	場への感動	<ul style="list-style-type: none"> きれいな海、冬の風、冷たい水、木に囲まれた感覚、そういうものを新しい視点で見る。(T) 	1
身についた こと	実感的認識	<ul style="list-style-type: none"> 第三者の立場で感動を味わうことを身につけた。(T) 子どもの目線になるということ、実際の普段の目線より低くしたり、歩くスピードをゆっくりしたりすることによって、普段は気付かないような自然を見ることができた。(S、O) 保育者は、危険に素早く対応しなければならない。(N) 集団生活でともに分かち合い、助け合うことが大切だと感じることもできた。(T) 身についたことは、外を散策しているときなど「あ、これで子どもたちは遊びを楽しむのではないだろうか」「これに興味をもつのではないか」など子どもの気持ちになって考えることが多くなった。(O) 	6

(傍線筆者)

致したふるまいをすること」である、ということである。「集団生活でともに分かち合い、助け合うことが大切だと感じることもできた (I,T)」という体験を通じた実感的認識によるものである。これは、野外における自己課題の意識化による実体験・本物体験をしたからであると考えられる。まさに、野外教育活動は、ヴァーチャルな世界や個人的行動パターンから、解放されたものである。これは、「ありのままの自然との出会い (O)」「他者との出会いと対話 (K)」という人間の当為として表出した帰結と言えよう。

中には、「きれいな海、冬の風、冷たい水、木に囲まれた感覚と、そういうものを新しい視点で見ることができた (T)」というように体験を通して、レイチェル・カーソンのように詩情豊かな感性と認識を深めているものもいるのである。⁷⁾ これらの学生の感性的認識や実践的行動は、野外という優れた教育資源

と向き合い、対話体験を通して初めて得られる価値あるものであると考える。しかし、学生の問題行動に対して、我々は、絶え間ない日常的な問題行動への関心・状況把握とは、対応関係の中で指導・援助を行うことが望まれることである。

表4は、GWにおいて学び合ったこと＝集団における学習効果を明らかにするために尋ねたものである。

最も反応の多く表れたものは、GWの協力性とGWにおけるアイデアを出し合ってグループテーマ研究の創造的作業や実現したことである。両者合わせるとほとんどの学生は、集団生活の効果について述べている。これは、野外活動という24時間の生活の中ではじめて得られる集団認識と実践行動が融合し、活動の成果を認めたと考えられる。

さらに、グループの仲間の力量を相当に認め合ったことである。例えば「私にはできないので、仲間の力

表4 GWにおける学び合い

(10名中)

カテゴリー	具体的事例	頻度数
1 GWの協力性	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力することが大切—そのことによって解決ができた。 ・自分の担当以外の「手伝い」「助け合い」を学び合った。 ・模造紙にまとめるのにスピードがいろいろで大変だった。 ・自分は絵を描くことを手伝ったり、班への協力を学んだ。 	6
2 アイディアの出し合い	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びのアイディアをみんなで出し合う（広場で葉っぱや木の枝を探し、活用した）。 ・意見を言い合って、学び合えることが分かった。 ・新鮮な感性に触れさせてもらうことができた。 ・他人の意見を聞いているだけでなく、きちんとコミュニケーションを取りお互いの気持ち、考えを知ることが大切である。 ・私にはできないので、仲間の力の大きさがよくわかった。 	6
3 達成の実感	<ul style="list-style-type: none"> ・一人では物理的活動に困難でも、グループでやると達成できることを実感した。 ・存在感を実感できた。 ・みんなで様々な発見ができることにより、知識が沢山増えていくことが分かった。 	3
4 課題共有	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の課題が違うが、その人、その人の調べたことを共有できた。 ・予想しなかった考えを多く取り入れた研究ができた。 	3
5 班長の役割の自覚	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が無力であり、一人で考え悩んでしまうことが多い。 ・やる気のある人やない人と一緒に個々の感情や思いを引き出しつつ物事を進めるのは困難。 	2

の大きさがよくわかった」「予想しなかった考えを多く取り入れた研究ができた」という意見が出されたことである。

このような集団構造が機能したことは、なによりも事前に「課題を共有してくりかえし、くりかえし、テーマ研究をすすめてきた」からである。

当初、野外教育活動に対しては「あまりかわりをもたないもの」「コミュニケーションをとったことがない」ために不安感を感じていたものが、実際に野外教育活動における学生同士の協力 communication、アイディアの出し合いという人間関係を調整しながら、協同的作業による研究成果をまとめ、また、協力し合って出された課題の成果が想像以上に効果があったことが明らかになり、意欲的に積極的に参加行動していることを把握できたのである。

以上のことから野外教育活動は、学生に必要不可欠な体験であることがわかる。

野外教育活動で体験したことは、将来保育士、教師になったあかつきには、即座に役立つことであるという成果が表5に表れている。学生も「子どもの目線で危険を予測して事故を防げるので、習ったことを忘れずに生かしたい」と述べているように、野外教育活動

は、危険を意識するのに有効であったと考える。

危険予知トレーニングを通して体験したことは、将来保育者を目指すものとして「安全性を重視した宿泊・集団生活の大切さ」に多くの学生が気づいたのである。学生は、野外体験の中で、「素晴らしい自然」での自然体験（遊び方）は、将来教師になったときに生かせるものと考えている。

事前に調査した5名の班長のうち2名は、野外学習の現場で事前調査をしたので、計画を予め立てて「外でどのような学びをするか」「チームの仲間を安全なコースで観察させるにはどうしたらよいか」とかなり事前準備をしていた。いかに学生自身にとっても実地踏査は、極めて重要な「活動の場」における「集団行動」とその成果を予測できるものであることを認識を深める動機づけになったようである。

表6は、2泊3日の野外教育活動の当初のイメージからどのように認識が変容したかを明らかにするために、「この野外教育活動での体験の結果、グループワークを通して学び合ったこと、2泊3日の今回の体験したことは、あなたの将来の仕事にどう生かせるか。」等の設問に答えたものである。最初は、野外活動に対して若干の不安を持つものもあった。

表5 野外体験の生かし方

(10名中)

分析カテゴリー	具体的事例	頻度数
危険予知トレーニング・環境教育 ゲームを通じた体験から	・将来目指す保育士として、子どもの目線で危険を予測して事故を防げるので、習ったことを忘れずに生かしたい。(T)(S).(Si)	6
生活面の協力	・安全に過ごせるように保育者は、知識をつけておくべきだ。(Y)(A).(K) ・生活面で協力することの楽しさを学んだ、仲間との協力の大切さを学んだ。(O)	2
自然体験のすばらしさを伝えたい	・楽しく一日一日を過ごせる雰囲気を作れるようになりたい。(T.N) ・自然体験のすばらしさを伝えたい。(T)	2
事前の調査計画が大切だ	・雄大な自然を生かして遊ばせてあげたい。(Si)	1
コミュニケーション力・観察力	・保育者としてどれだけ危険を把握しているか、またどんなことが予想されるかと事前に知らなければあわててしまっていけない。(Sy)	1
リーダーシップ・実行力を学ぶ	・コミュニケーション・観察力がとても大切で必要であることが分かった。(K)(この能力は、子どもをまとめるときに必要だ。)	1
信頼関係	・リーダーシップ・実行力、他人の力を借りること、第三者の目線に立ち、予想することができるということを強く学んだ。(Ts)	3
園外保育のプログラムの構想	・自分自身の実行力、計画力、段取り力を育てられたと考える。(Ts) ・班長さんを見て「まとめる力」が求められていると考えた。(K) ・体験は、自分に対する信頼感をうまくバランスのとれたものにすることができた。(Ts) ・野外学習でそれぞれ感じたことを持ち寄り「園外保育プログラム」を作成した。	1

(傍線筆者)

表6 野外教育活動における意識変容

(10名中)(複数回答)

分析カテゴリー	具体的反応	頻度数
関わり方	・自然と触れ合い、仲間意識を体験できた。 ・集団生活の素晴らしさを学び、集団の輪を乱そうとする人がいるのに注意できなかった。行動面では、自然を通して子どもの気持ちなどを学べてよかった。将来に生かせる貴重な体験であった、ありがとうございました。	4
体験から発見	・2泊3日の短い期間だったが普段感じることができないきれいな空気や景色を体験できてよかった。 ・班の人とカレー作りをして、とても楽しかった。 ・冬という季節に行われることに疑問があった。(個人的には大変であった。)だが、冬ならではの体験もあるということがわかり、くじけそうな気持ちを乗り越え、何にでも挑むことが大切であるということ学んだ。	3
経験の拡大	・都会の豊かな生活の中で、自然との触れ合いがなかったが、自然に触れることで、何でもできそうな気がした。	3
社会性と自然のよさ	・仲間との協力の大切さや自然の大切さ、自然の美しさ、その中で、危険を察知することの大切さを知った。	2
他者の長短をみつける	・どんな人でも長短がある。同じ将来を志す仲間なのだから、もし付き合えなかったり、不満な点が多く見つかったりしても「すごい！」を見つけてあげることが大切だと実感した。	1
野外体験の充実感	・班長同士になったり、他の班の人に助けってもらったりすることが多く、集団生活では、大変なことも多いけれど、それ以上に喜びや幸せもあると感じた。 ・貴重な体験を気づかせてくれた2泊3日であった。 ・周りの人に感謝したい。 ・将来に大きく役立つと考える。	5

(傍線筆者)

2泊3日の集団生活という中で、自分たちはどのように集団の中で仲間との融和、親密関係を保てるのだろうか、不安を持ったものが、凡そ3割であった。その不安は「今まであまり交流したことがなかった人と一緒に活動できるのだろうか、協力し合えるのだろうか」「相手に嫌な感情を与えないで協力しあいたい」というマイナスのイメージとプラスのイメージとが混在していたのである。

また、最も不安を感じたことは「2泊3日、24時間、生活・行動を共にする場合、一定の時間的制約の中で、自分や友達をコントロールできるだろうか」と心配しているものが実に凡そ9割に達していたのである。これは、日々学生は、自分の都合に合わせて「やりたいことをやる」「いやなことはしない」という自己中心的な生活から抜け出て、集団の中で「健康や生活規則」を維持するという自信を喪失している証拠であろう。学生は、日常的生活習慣の自己抑制力、社会的適応能力を喪失しているかを、自らの体験を通して実感したのである。そして、いかに、その「不安」を克服するかが大きな課題となったのである。

野外教育活動終了後、「あなたは、2泊3日の野外教育活動を通して意識や行動はどのように変わったか」を尋ねた。その結果は、次のようなものであった。

①「仲間との協力の大切さや自然の大切さ、自然の美しさを実感できたとともに、その中でも危険を察知することの大切さを学んだ」と反応を示している。単純なとらえ方ではなく、野外教育活動の教育的価値を「協力性」「自然のよさ」「野外での危険の予測」という三つの要素の相互関係からとらえている点で上記の「当初の不安」が「体験的に意識、行動変容が顕著」に表出しているのである。

さらには、②のように人間のよさの発見と態度変容が見られたことである。

②「どんな人にも長短がある。同じ将来を志す仲間なのだから、もし付き合えなかったり、不満な点が多くあったりして首をかしげるような人でも、「すごい！」を見つけて伝えることは、大切だと実感した。」これは偏狭的な見方・意識が、他者のすぐれた行動・態度を発見することにより、共感的理解へと深められたということで、本学の野外教育活動の効果としてあげることができよう。

また、集団生活について、次のような学生の意識変容も見られたのである。

「集団生活の難しさを学び、集団の輪を乱そうとする人がいるのに注意できなかった」と自己反省をしている学生が存在したことに注目する必要がある。

二月の太房岬は一年のうちでも、最も寒い時期であ

る。学生の中には、次のような意識と行動をもつ学生がいることを発見できた。

「冬という季節に行われることに疑問があり（個人的には大変であった）しかし、冬ならではの体験がある、ということが分かり、条件を乗り越えて、何でも挑戦することの大切さを学ぶことができた。」

これらの意識は、野外における実体験において、葛藤やつまずき、不安を解消し、人間的に成長する動機となったことを物語っているのである。

（3）野外教育活動における態度変容の様態

態度 (attitude) は、知的なものとは異なり、測定の難しい側面を持っている。そこで、野外体験活動のプログラムのそれぞれの『学びの場』において、学生は、野外体験活動を通して「心情（意識）から認識へ」「認識から態度へ」「態度から行動へ」と変容していることを学生のレポートのまとめから抽出・分析したものである。それが、表7・表8である。

表7は野外教育活動の「レポートのまとめ文(22.3.5)」から抽出したものである。

表7からは、野外体験によって、その体験したことよさを保育に生かそうとする学生の意識が醸成されたことを読み取ることができる。

野外教育活動を通じた態度の変容として、大きく、四つの態度変容が見られた。

- ①自然や社会事象に対する関心・意欲・態度が身についたことである。自然への接し方や心構えは、その自然の美しさや素晴らしさに感心したり、驚きや疑問を持ったりすることができたと考える。
- ②主体的思考ができるようになった。つまり、自分の考えを持って他者に意思を伝え、互いに理解し合うことができるようになった。
- ③社会的態度が身についた。学生は、自分の立場だけ主張するのではなく、他人の願いや考えに共感を持って責任ある行動をすることが大切であると気がついたのである。
- ④他人の意見や信念に対して寛容になった。学生は、他人の考えや意見に対して広い寛容な心で対応して適切な判断を決定することが大切であると実感していた。

表8は、野外教育活動の実践過程、における態度変容様態A→B→Cである。言語記述表現したものを抽出して、比較し、態度変容の様態を明らかにしたものである。

Aは、野外教育活動の最初の出会いにおいて発見したことである。Bは、仲間と「かかわる活動」における集団で認識したことである。Cは、野外教育活動の終了とともに野外における成果をトータルに認識していることである。

表7 野外教育活動における態度変容の様態

(10名中)

カテゴリー分類	内容	頻度数
自然体験（触れ合い）	<ul style="list-style-type: none"> ・都会では、目にすることのできない植物、生物に触れることができた。 ・「木の実や貝殻を拾って、子どもと一緒に作品づくりをしたり、体を動かしたり、普段の園生活では体験することができないような自然とたくさん触れ合っていく中で、自然の大切さや遊ぶ楽しさを子どもに伝えることができると考えた。」 ・子どもは自然を通して成長していくことが大切だと実感した。 ・<u>普段触れることのできない多くの自然に触れ、素直にいい体験ができたと感じた。</u> ・<u>自然は、多くの知識や体験を学ぶことができる大切な環境である。</u> 	15
園外保育	<ul style="list-style-type: none"> ・外で遊ぶことが大切である。運動能力の向上にも貢献する。 	4
健康安全・危険・配慮（対策）	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>園外活動を行う際に、危険な場所に近づかないよう事前に危険な場所を調べておくことが大切である。</u> ・けがや病気等の対処法を考えておく必要がある。 ・出発前から、子どもの体調や精神状態に充分配慮しなくてはならない。 	8
集団生活（きまり）	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>「集団生活の大変さやグループワークを通して職員全員で協力することの素晴らしさや重要性に改めて気づくことができたので、今後の生活に活かしていきたい。」</u> ・集団生活を通して、始めて話し、親しくなった。 ・<u>グループワークで、自分の意見を言ったり、相手の意見を聞いたりすることができた。</u> ・自分というものを振り返ることができた。 ・<u>班活動を通して、思いやり、優しさをもって生活することができた。</u> 	6
実地踏査	<ul style="list-style-type: none"> ・園児にわかりやすく説明するためにも事前の下調べが大切である ・<u>自然からいかに楽しみを見つけ自然への感謝の気持ちを見いだせるようにするかは、事前の下調べが大切である。</u> 	5
遊び（遊具）	<ul style="list-style-type: none"> ・意識すると、自然のなかには、いたるところに、遊び道具がある。 	4
保育者の目線・立場（指導（援助）・言葉かけ）	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに自然の大切さや楽しさをどのように伝えたらよいのかを学ぶことができた。 ・<u>遊ぶ機会も、自然も減り、また、遊べる場所も少なくなっているため、自然をたくさん感じられるような援助をすることが大切だと学んだ。</u> ・葉っぱなどを採ろうとする園児に、自分ならどのように子どもへ声かけをするかと考えてみた。 	10
子どもの目線（配慮）	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>「最初は、自然の中でできる遊びにどのような遊びがあるか浮かばなかったが、実際に現地に行くと」いろいろな遊びがあることが分かった。</u> ・<u>子どもの目線で、危険箇所を見ることを心がけた。そのことが、子どもに安心感を与えることになる、ということも実感できた。</u> ・子どもの目線に立って考えることが多かった。 	12
感性	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>自然と触れ合うことで、子ども本来の感性を伸ばせるということを感じた。</u> ・自然との触れ合うことの楽しさは子どもにとって感受性を豊かにするよい体験になると確信できた。 	6
人間性	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>自然との触れ合うことの楽しさは子どもにとって人間性を豊かにするよい体験になると確信できた。</u> 	5
感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間の大切さに改めて気づくことができた。 	6

(傍線筆者)

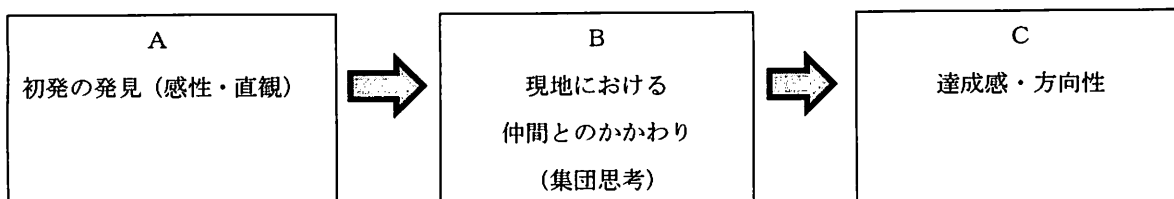


図1 野外実践過程における態度変容

最初、学生は、野外に対して特に何もイメージとして発見し、疑問がわからないか、野外教育活動を通して、「新しい視点で見ることができた」「子どもの目線が具体的にわかった」というように、現地でもまた集団で学んだことができたという感想を書いているのである。

それでは、図1のA・B・Cの三つの場面について、以下に分析する。

表8は、A 初発の体験活動によって「発見したこと、

感動したこと」(22.2.17)、さらに、B 野外教育活動における「グループ活動で学んだこと、野外で学んだこと」(22.2.18)いわゆる集団活動形成の意味、そして、C「レポートの結論」(22.3.5)から導き出された「野外教育活動」の価値認識、態度変容の様態を時系列に把握することを意図して比較検討するものである。

A 最初の発見と感動として、T.Mは、「都会で育った子どもがここへ来て遊んだら何を感じるか？」を問

表8 抽出した学生の態度の質的変容

項目 抽出	A 発見したこと 感動したこと	B グループ活動で学んだこと 野外で学んだこと集	C 野外活動を終えて 達成感・方向性
T. M	<p>都会で育った子どもがここへ来て遊んだら何を感じるか？ <u>キレイな海、冬の風の冷たさ、水の感触、木に包まれる光を受けらる感覚、そういったものを新しい視点で見ることができた。</u></p> <p>自分でもなく、第三者の立場で感動を伝えることを身につけたい。</p>	<p>一番学んだことは、<u>自分の無力さ</u>です。今までリーダーシップをとって人に何かをさせる、してもらうことはできていました。しかし、<u>今回やる気のある人やない人と一緒にこの感性や思いを引き出しつつ物事を進めるのはとても困難でした。</u>しかし、同時に私にできないことができる<u>仲間の力の大きさ</u>がよくわかりました。自分と異なる予想もしない考えを取り入れることができました。</p>	<p>この野外教育活動を私が実践できたのは様々な方のご支援があったからである。自分一人では思い立ってもしなかったことであろう。企画、実地踏査、計画してくださった先生方に、3日間万全のサポートともてる知識を私たちに与えてくださった少年自然の家のみなさん、本当にありがとうございました。また、これまで個での学習が多かった大学生活で仲間と協力し、自分にはない可能性や技術、個性から私の学びを大きく刺激してくれた仲間にも感謝しています。<u>自分では思いつかないであろう発想、努力してもなかなかできない行動を難なくこなす仲間の姿を見て、私はより一層の向上心を感じる</u>ことができました。このように「<u>学び合うこと</u>」を特別な時だけでなく日常の学びの中に取り入れることの必要性を強く感じた活動であった。今回した経験は、保育者としてだけでなく、私が生きていく過程にまで影響したものであった。<u>またこの経験から、日常的に生活や言葉遣いを正したり、今まで見過ごしていた小さな自然とも向き合ったりすることができるようになった。</u>学ぶことの楽しさ、素晴らしさについての私の概念が大きく変わった活動であった。</p>

T. A	<p><u>子ども目線でみるということがなかなか理解できなかったが、グループのみんなと一緒にフィールドワークをして教えてもらうことができた。</u></p>	<p><u>一人では物理的、精神的に困難なことでもグループでやると達成できるということが実感できた。また、リーダーがいることにより、まとまっていくという存在感を実感した。</u></p> <p><u>新鮮な感性に触れさせてもらうことができた。</u></p>	<p>事故が起きてしまって引率者がパニックになってしまったら子どもたちも動揺してしまう。三つのないについて、①知らない（現場を知らない人）②できない（技術が身につけていない人）③わからない（できるかどうかわからない人）この三つのない人は、引率してはいけない。そして、危険行為を目にしたら、すぐに叱る。理由を説明している余裕はない。後で叱った理由を説明すればよいのである。そして、事故が起きたら、まず自分自身の安全確保、次に子どもたちの安全確認ができたなら、怪我をしている子どもの手当てに向かう。この場合、1人では困難なのでスタッフ間のコミュニケーションをとる必要がある。・・・危険予知トレーニングより、<u>何が起こるかわからない野外活動の中で、予測できる事態を想定し、事故が起きてしまったら、あわてずに対処できるように知識を身につけておくことが必要である。</u>そのためには、子どもたちと野外活動をするときには事前実踏をして、危険箇所等の確認をすることが大切であることを学んだ。その上、子どもたちと一緒に事前学習をする必要性もある。危険だけでなく、体験の楽しさなどを味わわせることで、創造力を養うことになる。</p> <p>さらに、<u>日頃からスタッフ間のコミュニケーションをよくし、信頼関係を築いておくことが大切である。</u></p>
K. A	<p><u>子どもの目線に立って自然で遊んでみて、たくさんの遊び方があり、とても楽しい体験ができた。危険なこともたくさんあったので、子どもたちを連れて行く場合は、事前に下調べをしておくことが大切だと改めて感じた。</u></p>	<p><u>グループで行動するので、自分勝手な行動はよくないと学んだ。</u></p> <p><u>意見を出し合って、グループワークをしていくことは、とてもよいことだし、お互いを刺激し合えるなど学んだ。</u></p>	<p>自然の中で夢中になって遊ばば遊ぶほど危険なことが増えるということが分かった。<u>遊ぶことによって、保育者としての目線と、子どもとしての目線、二つの立場から危険なことを知ることができた。</u></p> <p><u>お世話になった人への感謝とグループワークの素晴らしさを学ぶことができた。一つのことに全員で取り組む素晴らしさや大変さを実感した。先生になったら、チーム保育を心がけ、協力して子どもたちと接していきたい。</u></p>

(傍線筆者)

いかけながら、自ら「キレイな海、冬の風の冷たさ、水の感触、木に包まれる光を受ける感覚」を子どもたちに体験させたいという新しい視点を見つけているのである。Bの野外教育活動の中心であるGWでは、「自分の無力さ」から「仲間と共に困難なことや協力し合ったこと」には、GWの研究活動において目的を

達成しているのである。Cの最終レポート記述にあるように体験したことについては、次のように述べている。「自分では思いつかないであろう発想、努力してもなかなかできない行動を難なくこなす仲間の姿を見て、私はより一層の向上心を感じるすることができました。」と野外教育活動を終えた結論に書いていた。他

者の影響で自分自身が変わったと実感したことがうかがえる。また、野外活動を通して「日常的に生活や言葉遣いを正したり、今まで見過ごしていた小さな自然とも向き合ったりすることができるようになった。学ぶことの楽しさ、素晴らしさについての私の概念が大きく変わった活動であった。」とも述べている。まさに「認識から態度へ」「態度から行動へ」変容していることがわかる。

A 最初の発見と感動として、T.A は、「子ども目線でみるということがなかなか理解できなかった」と感じていた。実際に野外に出かけてみないと実感できないことである。しかし、「グループのみんなと一緒にフィールドワークをして教えてもらうことができた。」と述べている。B の野外教育活動の中心である GW では、「一人では物理的、精神的に困難なことでもグループでやると達成できるということが実感できた。」と困難なことでも、グループ活動・野外活動を通して、多くのことを学んだのである。C の最終レポート記述にあるように体験したことについては、「何が起こるかわからない野外活動の中で、予測できる事態を想定し、事故が起きてしまったら、あわてずに対処できるように知識を身につけておくことが必要である。」と野外教育活動を終えた結論に記述している。この学生は、保育者としての視点から自然を見て、そこから危険予知にまで考えを及ぼしているのである。そして、そのためには学習中に、危険に対処できるような知識を身に着けると自覚するようになったのである。つまり、自ら保育者を目指しての自己の将来課題を発見したと言えるのである。

A 最初の発見と感動として、K.A は、「子どもの目線に立って自然で遊んでみて、たくさんの遊び方があることを実感したのである。普段なら気が付かないことでも、視点を与えて観察することで、多くの気づきを学生にもたらしたのである。⁽⁴¹⁾」B の野外教育活動の中心である GW では、「グループで行動するので、自分勝手な行動はよくない」と集団における決まり・ルールを体感したのである。また、「グループワークをしていくことは、お互いを刺激し合える。」ということで、学生は、多くの知的刺激を受け、学ぶことの大切さを実感したのである。C の最終レポート記述にあるように体験したことについては、「お世話になった人への感謝とグループワークの素晴らしさを学ぶことができた。一つのことに全員で取り組む素晴らしさや大変さを実感した。先生になったら、チーム保育を心がけ、協力して子どもたちと接していきたい。」と野外教育活動を終えた結論に記述していた。この学生は、野外教育活動を通して自然や社会事象を多面的に捉え、他人の意見を十分に聞き、寛容な心で対応した

結果、客観的に判断できるようになったものと言える。

以上から、野外教育活動の体験を通して、学生達は、意識化された表現・意識化された行動をとっていることがこの言語記述から明確になった。また、学生の体験による意識化は、行動への動機づけになると考える。まさにデューイの「なすことによって学ぶ」Learning by doing という体験の持つ教育的価値を学生は、実感しているのである。

5 結論

野外における環境体験に関する研究を通して明らかになったことは、次のように要約できる。

野外教育活動において学生は、不安の中に期待をかけて、GW・地域調査研究を通して、大房岬の自然を現地の人々の働きに出会い、対象の関係が「発見」「感動」「実感的認識」への深化過程に自己の既存概念を変更の契機と対象を捉える視点と方法を認識するようになった、ということである。さらに、野外教育活動において、学生の認識の変容のみだけではなく、GW、全体実践活動を通して、人間関係を調整しながら社会的行動、態度形成がなされた、というように考えられる。そのことは、まさに「なすことによって学ぶ」という体験活動の人間形成の果たす役割を如実に物語っているのである。

また、班長の努力にもかかわらず、班員の活動合意、徹底した合力、助力、分担の活動を推進できない「場面」が見受けられた。積極的な教員の指導力を発揮する必要がある。

野外教育活動における集団の徹底した認識と実践として、1 年次学生には、野外教育活動のみでなく、日々の大学の指導においても「徹底した集団の認識と実践的参加行動の持つ意味を実感させるようにする」ことが大切である。そのためにも、大学教員は、日頃の授業実践を大切に、授業に臨むにあたって、学生に興味・関心をもたせるような教材開発と徹底した指導が必要になってくる。

研究班長の事前の「実地踏査」は、極めて有効であった。各班長からは、「野外教育活動の場と実施方法がイメージでき、班員に周知徹底を図ることができたからである。」との意見が出された。

学生たちは、「自己の成長」「保育者の立場」というのを具体的に野外教育活動を通して、体感できたと考える。つまり、「保育者の在り方」「認識の深化」を見ることができたのである。学生の態度変容が見られたと言える。

最後に、将来的展望として、野外教育活動は、今日のヴァーチャルな社会からフィールドを現実の野外に

移し、野外の活動を通して、学生の自己課題やグループテーマを研究することにより「実体験的活動」「集団における人間関係調整能力」の形成に極めて有効であることが証明されている。(佐島、原田他「野外教育活動における健康教育の実践的研究 2005 教材学研究 Vol.15」。佐島、田中「野外における環境学習－3泊4日の野外教育活動を通して」2010教材学研究 Vol.19)

野外教育活動は、1,2年、専攻科の縦割り合同の実践活動が望ましい。(それが本学の特色ある、シラバスになると考えられるからである。そのためには学生が主体となって計画立案－実施－評価を実践的に展開したい。このことによって、文字通り学生主体の野外教育活動といえる。この実践的活動が保育者になったときに活かされるものとするからである。)

なお、本研究で明らかになった野外体験学習によって、確実に自然と社会の観察の仕方、認識力が形成され、さらにGWを通して「社会的態度・行動が変容」する様態も明らかになった。

この認識形成と態度変容は、以後の大学の学習を研究にどのように転移・発展するか継続的に学生の「学びの姿」(認識形成・態度変容)を検討していく必要がある、と考える。

6. 今後の課題

「環境教育実践講座」の開設により、(他大学との連携による)フィールドワークを中心に、ピオトープ作りの計画から、作成、環境マインドの育成を全学挙げて取り組んでいきたい。その中には、「2級こども環境管理士」を目指すプログラムも含まれる。

「野外教育活動実践ノート」を作成し、野外教育活動の事前指導から、活動中、事後指導まで一冊のノートにまとめられるようにする。このノートは、学生自ら野外教育活動の自己評価に資するとともに、将来保育者として野外活動に実践できる「指導・援助の手引き」として有用なものにすることができる、と考えるからである。

(註)

註1 佐島群巳(1964)「野外観察における認識力の学年的発達」日本地理教育学会誌 新地理 Vol.11 No.4 pp46-63

小学校の1～6年までの子どもの野外研究において観察力はどのように「発達するか」を「自由観察群」「指導観察群」の観察力の様態とその発達の特性について明らかにした。この研究における低学年児は、「自由に観察したグループ」の観察力は、「指導の視点と方法」を与え

ることによって「素朴印象的観察段階」から「比較観察段階」へ発達することが明らかになった。同様に、小学校中学年・高学年児の場合、「自由観察」では、「比較観察段階」のものが「指導の視点と方法」を与えることによって社会事象の「相関関係的観察力」へと発達することが明らかになった。このように教師の指導力は、子どもの観察力形成に大きな役割を果たしている、と言える。

(引用文献)

- (1) 佐島群巳・原田涼子・菊地紀子・上原真理子 (2005)『野外活動における健康管理の実践的研究－野外活動と養護教諭の役割をめぐって』教材学研究 No.16 pp.215-220
- (2) 佐島群巳(1997)『環境マインドを育てる環境教育』教育出版 pp.33「野外体験とは、自分をとりまく自然環境や社会環境、文化環境に興味・関心を示し、直接働きかけ、自分の願いを実現する行動である。」この環境体験は人間形成にとって不可欠な学習である、といえる。
- (3) 佐島群巳・田中浩之(2010)『野外における環境学習』-3泊4日の野外教育活動をとおして-教材学研究 No.21 pp.197-206
- (4) 河合隼雄「序文」倉光修編『学校臨床心理学』誠信書房 臨床心理学全集に所収2004 p.31
- (5) 佐島群巳編「新社会科授業論」教育出版 1992 p.12
- (6) 河合隼雄「子どもと学校」岩波新書 1992 pp.33-34
- (7) レイチェル・カーソン/上達恵子訳『The Sense of Wonder センス・オブ・ワンダー』佑学社(1991) pp.22-23

(参考文献)

- (1) 朝岡幸彦・隆旗信一(2006)『自然体験学習論～豊かな自然体験学習と子どもの未来～』高文堂出版社
- (2) 佐島群巳・堀内一男・山下宏文(1993)『学校の中での環境教育』国土社
- (3) 佐島群巳(2002)『環境教育の基礎・基本』国土社